第２章　古代ギリシャ時代の旅

「ギルガメシュ叙事詩」に次いで伝承に登場する旅は、古代ギリシャ文学を代表する叙事詩「オデュッセイア」に見る海上の旅である。「オデュッセイア」は「イーリアス」とともにギリシャ文明の夜明けの時代（前８世紀）に生まれた壮大な叙事詩である。主題となっているトロイア戦争はミュケーナイ文明時代の紀元前1200年代に起こったと推定されており、前８世紀に生きたとされるホメーロスが、口承によって語り伝えられてきた 400 年も昔のトロイア戦争を題材に「イーリアス」と「オデュッセイア」という２つの物語にまとめたことになっている。トロイア戦争が史実であったことは、「イーリアス」の記述を事実と信じたハインリヒ・シュリーマン（1822~90）がトロイアやミュケーナイの遺跡を掘り当て、その後の多くの発掘や考証によって実証された。トロイアはエーゲ海から黒海に抜けるヘレスポント海峡（現ダーダネルス海峡）の入り口を扼する小アジア北端の要衝で、この地をめぐってミュケーナイと小アジア勢力との間で長年にわたる争奪戦が行われたことが窺われる。トロイア戦争が史実であれば、後日譚の「オデュッセイア」も何らかの歴史的事実を含むものと考えられ、様々な推定が行われているが、確かなことはわからない。

トロイア戦争に勝利したギリシャは、暗黒時代といわれるその後の 400 年間に、海峡を越えて黒海に入り、沿岸に多くの植民地を建設していったことが証明されている。

伝承と事実の間の旅：叙事詩「オデュッセイア」

「オデュッセイア（＝オデュッセウスの物語）」は、10 年に及ぶトロイア戦争を戦ったギリシャ軍の英雄の１人イタケーの王オデュッセウスが、帰国の船出をしたのち海神ポセイドンの怒りゆえに帰国を妨げられ、さらに 10 年も地中海をさ迷うはらはらどきどきの冒険物語である。とはいえ、「オデュッセイア」はオデュッセウス漂流の物語だけではなく、トロイア戦争の後日譚として、トロイア戦争に出陣したギリシャ方の多くの将たちのその後の運命も語られている。全 24 巻の長編（12,110 行）のうち、オデュッセウスの遍歴が語られるのは第５巻～第 13 巻の８巻のみである。第１巻～第４巻では、神々の集会でなぜオデュッセウスがトロイア陥落後８年間も帰還できないかが説明される。神々が協議の結果彼を帰国させることに決め、息子テレマコスが神々の勧告にしたがって先に帰国しているピュロス王ネストールとスパルタ王メネラオスを訪ね、行方不明の父の消息を知るまでの物語である。第５巻で初めてオデュッセウスが登場し、第８巻までにおいて、７年間閉じ込められていた美女カリュプソの洞窟から、ヘルメス神に救われて可憐な王女ナウシカの住む島に到着し、王宮に迎えられてカリュプソからの脱出と王宮到着までの冒険が語られる。第９巻～第 12 巻で、オデュッセウスの素性を知った王の求めに応じて、一人称でトロイを出てからの長い冒険が語られる。一つ目のキュクロープス、魔女キルケー、ハーデス（冥界）下り、セイレンの誘惑などの物語が続く。全体の半分に当たる残りの 12 巻（第 13 巻～第 24 巻）は、オデュッセウスの故郷への帰還、留守中の妻ペネロペイアに対する傍若無

人な求愛者たちに対する復讐の物語、というのが全体の構成である。

「ギルガメシュ」では、旅への出立が自主的で、空間の旅である以上に自己の探求と成長への旅であったのに対し、オデュッセウスはギリシャ軍きっての智将としてすでに完成された人間であって、旅を通じて人格が変化したり成長したりする物語ではない。むしろ一人称で語られる漂流の内容は、人間の好奇心や名誉欲、冒険心や恐怖、不信や裏切りに満ちた人間くさい物語である。ルチアーノ・デ・クレシェンツオ（草皆伸子訳）「『オデュッセイア』を楽しく読む」は、その面白さを次のように書いている。

> ひとつだけはっきりいえることがある。当時『オデュッセイア』は今日のテレビドラマに当たるものであったということだ。つまり、紀元前 8 世紀にギリシャ人の金持たちは毎晩夕食後どのように過ごしたのだろうか、と考えるとわかりやすいだろう。別に特別のことをしていたわけではない。シンガーソング・ライター（できれば盲目のほうがよい）が歌うのを聞いていたのだ。歌手たちは食事やちょっとした褒美をもらう代りに毎晩少しずつ面白い話を物語った。

叙事詩「オデュッセイア」は、オデュッセウス漂流の部分だけがクローズアップされがちだが、物語のバックグラウンドは、トロイア戦勝利後のミュケーナイの政治的状況であり、将兵帰国の後日譚は、ギリシャ各地から集まった小王国の領主たちの運命が何らかの歴史的事実を反映しているのかもしれない。トロイアを攻めたギリシャ軍には神々の怒りに触れる行いも多く、オデュッセウスの苦難のみならず、勇将アイアースは海中に沈み、総大将アガメムノンは嵐を逃れて帰国は出来たものの、妻とその愛人アイギュストスのたくらみによって殺され、スパルタ王メネラオスは、オデュッセウスと同様 8 年間の放浪の後にようやく故郷に辿りついている。「イーリアス」がトロイアとの攻防を描く英雄物語であるのに対し、「オデュッセイア」は、漂流の冒険譚も復讐の物語も個人の生き方や感情を生き生きと描いており、それらの詩句についての分析研究も多い。人によって解釈は様々であるが、それだけ読む人によっていかようにも解釈できる内容をもっているということであろう。物語に登場する船や航海の仕方などは、文献学や考古学などを通じて研究され、地中海の交通や海運の状況を推測する手がかかりをも提供している。

オデュッセウス遍歴の道程　「オデュッセイア」と「イーリアス」はヨーロッパでは教養の一部として誰でも知っている物語である。当然ながら、10 年に及ぶオデュッセウスの遍歴に登場する架空の場所を、その描写を頼りに現実の地図上に特定しようという試みは、前 5 世紀のギリシャの歴史家ヘロドトスをはじめ、過去現在の多くの学者たちによって行われている。実際に読んでみると、確かにヒントと思える描写も多い。この点について既出の「オデュッセイアを楽しく読む」は、第６話に出てくるはすの花（麻薬の効果がある）を食べるロードパゴイ族の国について、エジプト説、リビア説、はてはポルトガルだったという説まであることを紹介して、そんなことは「白雪姫と七人の小人たち」がどこの森に住んでいたかを知ろうとするのと同じで意味がないと言っている。そのとおりだという気

もするが、多くの学者たちが様々な説を唱えており、実際どのようなコースを辿った可能性があるのか、事実かどうかを超えて興味がある。旅がテーマの本書では、どういう説があるかくらいは紹介しておこう。

日本で紹介されている中で最も詳しいのは、フランス人ヴィクトール・ベラール（1864～1931）によるものである。その図は田中秀央他訳「オデュセイアー」（上）に、Berard's Theory of the Wandering of Odysseus として掲載されているし、バーバラ・レオニ・ピカード著（高杉一郎訳）「オデュッセイア物語」にもベラールの別版図とアーンリ・ブラッドフォード Ernle Bradford（1922～1986）の同じような地図が対比して紹介されている。また、塩野七生氏の「ローマ人の物語Ⅰ」にも、部分的には違うがよく似た地図が載っている。

ベラール説をざっと辿ってみると次のようになる。エーゲ海を出た後まず「はすの花を食べる人の島」（チュニジアのジェルバ島）へ行き、ついで「一つ目巨人キクロープスの島」（ナポリ湾）へ行き、「風の神アイオロスの島」（ストロンボリ島）から「食人種の住む島」（コルシカ島南端のベニファチオ）へ、ここからイタリア半島の南西岸を「キルケーの島」（ローマに近い海岸）、「ハーデス（冥界）への入口」（ローマとナポリの中間）、「スキュレとカリブデスのいる島」（シシリア島メッシーナ）を経て、「カリュプソの囚われ人となったオギュギュエ島」（ジブラルタル海峡のアフリカ海岸）で７年間を過ごす。そこからヘルメスに救われて故郷に近い「王女ナウシカの島」（ギリシャ西岸のコルフ島）に辿りつき、この島で漂流の一部始終を語り、島の王の支援でイタケー（ペロポネソス半島の西岸）に帰還する。

ホメーロスの叙事詩が成立したとされる前８世紀は、ギリシャ人が西地中海方面に新たに殖民活動を展開し始めたばかりの時期であって（黒海沿岸への植民はトロイア戦争後に始まっている）、シチリア島や南イタリア各地にギリシャの植民地が生まれつつあったが、まだマルセイユ（マッシリア）やマラガなどのヨーロッパ大陸西北岸にまでは達していない。物語のバックグラウンドは、彼ら自身の体験とフェニキア人を通じて得た知識に基づいているのであろう。オデュッセウスの漂流のコースについて詳しく知りたい方は international 版 wikipedia の Geography of the Odyssey を参照されることをお勧めしよう。

いずれにしても、ギルガメシュの自己の内面への旅と違い、世界への関心、国際化への道、地理的な知識や関心が大きな主題になっており、観光動機のひとつを代表するものであるといっていいだろう。

神話・叙事詩から科学へ：神々から人間へ

以上、「ギルガメシュ叙事詩」と「オデュッセイア」という古代を代表する叙事詩に登場する旅をみてきた。現代の旅に例えれば、前者がどこへ行くか以上に「旅」に出ること自体に意味があり、傷心を癒し、自省し、自己探求につながる心の旅に例えられるとすれば、後者は旅の冒険やハプニング、発見の楽しさを求める旅を代表する内容になっている。と

もあれ、両叙事詩以前には、旅についての古代人の想いを想像させる記録は存在しない。また、古代の伝承叙事詩といえば「ギルガメシュ叙事詩」と「イーリアス」と「オデュッセイア」の３作品しか現代に残っていない。したがって、この時代までについてはこれ以上旅についてのまとまった記録がなく、旅はまだ具体性をもって語られてはいない。

民族がその黎明期に持っている神話や伝承は、文字のない時代の出来事や教訓などを口承で伝えてきた物語である。その中で叙事詩は、断片的で錯綜した遠い昔の数々の伝承の中から、詩才ある者が取捨選択して語りの筋書きを作り上げ、何代にもわたって語り継ぎ、改変されながら次第に固定化してきたものである。「オデュッセイア」は「イーリアス」とともに前８00 年頃のホメーロスの作と伝えられるものの、詩人ホメーロスの実在を確認することはできない。高津春繁著「ホメーロスの英雄叙事詩」によると、ホメーロスの生きた年代を求める学説には、早いほうは紀元前 1159 年から遅いほうは前 686 年まであり、生まれた場所も不明である。ともあれ、作者がホメーロスであろうとなかろうと、ギリシャ文学は前 700 年頃、「イーリアス」と「オデュッセイア」の２大叙事詩の文字化という形で突然誕生したのであった（高津春繁編「古代ギリシャ文学史」）。

ギリシャ文明の突然の開花は、ギリシャ人がフェニキア人と接触し（前９世紀頃と推定）、安定的な通商関係を維持することによって、フェニキア人の表音アルファベット文字（子音のみ）を学び、これを改良して自分たちの文字（ギリシャ文字）とすることによって実現した。東地中海には、メソポタミヤとエジプトの先進文明の影響を受けて、紀元前 2000 年を少し過ぎた頃にまずクレタ島に壮大な宮殿文化が開花し、ついでその影響下にペロポネソス半島南部にミュケーナイ文明が栄えた。両者とも前 1700～1500 年頃に最盛期を迎えるが、ともに 1200 年頃突然滅亡している。クレタ・ミュケーナイ文明時代の宮殿の遺跡から粘土板の記録が多数発掘され、「線引きＢ」なる固有の文字が一部解読されたが、記録の内容は王室の財産管理や必要最小限度の行政の記録などでしかなかった。クレタ・ミュケーナイ文明滅亡後の 400 年間は何の記録もないまま過ぎ（それゆえ暗黒時代と呼ばれる）、前 800 年を過ぎた頃にギリシャ文字が誕生し（発見された最古のギリシャ文字は前 750 年頃の壺に書かれたもの）、かくして口承の叙事詩が文字によって書き残されたのであった。

ギリシャ文化がそれ以前の文明になかった「知の文化」を発展させ得た理由は、文字の改革が大きな要因であるという。多種多様な記号の習得に長年の訓練を要する象形文字や音節文字は、結果として書くことを専門職階級だけに限定していた。これに対し、ギリシャ人が工夫したアルファベットは、２ダースほどの記号を使って全てを書き表すことができ、読み書きの能力を速やかに身に付けることを可能にしたのであった。

しかし、それでもなお、文字は長らく王家の財産や行政の記録などに使用されるのみで、文学その他の非実用的な事柄は、吟唱や口承による伝達が中心であった。ホメーロスの叙事詩といえども暗唱するために作られたものであって、記録にとどめられたとしても、それはテキストを定着させるためのもので、読者に読ませるものではなかったのである。

ヘシオドスの叙事詩：初めての生身の人間の声　ギリシャ文字の誕生は、記録による伝承

の継承だけでなく、やがて事実の追求へと向かう新しい知性の登場を促し、人類史上初めて特定の個人の肉声を記録にとどめることになる。その最初の人がヘシオドス（生没年不詳、ホメーロスと同じ前 800 年頃の人とされる）であった。ヘシオドスは「神々の誕生（皇統記）」と「仕事と日々」の２作品を後世に残したが、それぞれの中で著者が自分自身について語り、はっきりと作品の意図を述べ、作品の中で自己主張を展開している。どちらも彼以前にはなかったことである。ホメーロスとの違いは、語り継がれてきた伝承の物語と特定の作家による創作の違いであり、その差は決定的である。後者の場合、作品の内容は伝承者としての巧拙によってではなく、ヘシオドス個人の主張として批判の俎上にのせられること意味している。

ヘシオドス自身の語るところによれば、彼の父は小アジア北岸のアイオリスの船乗りであったが、海を渡ってギリシャ本土に行き、ヘリコーン山麓のアスクラ村に住み着いた。そこで羊飼いをしていた少年（ヘシオドス）が、詩神ムーサに詩の霊感を授けられて詩人として立つことを決意し、「ホメーロス流の真実に似た虚言ではなく、真実そのものを語る、と宣言するのである」（松平千秋訳「仕事と日」の解説より）。冒頭に詩の意図を述べることはそれまでになかった行き方であり、「真実を強く主張する自信は、詩人自身の深刻な目覚めを契機として生まれたものであろう」（久保正彰『ヘシオドス』「西洋哲学の基礎知識」）。

個人の思想信条の表現が始まったという意味で、ヘシオドス以前と以後では根本的な相違が生まれた。ヘシオドスはホメーロス同様、紀元前 800 年頃の人としかわからないが、ヘシオドスが先鞭をつけた「自己の思想信条の表現」を引き継いだのが、前６世紀の抒情詩人や悲劇詩人たちであった。抒情詩人と呼ばれるようになった人たちは、叙事詩とは異なる形式で詩人自身の思いや立場を歌い始める。舞台における合唱抒情詩の朗読に俳優を加えて前６世紀に誕生したとされるギリシャ悲劇は、豊かな神話の物語から自由に題材を得て、政治とは、国家とは、人間とは、という根源の問をめぐって作品を競った。その根源的な問の中から学問や哲学が誕生し、神話と伝承に依存する知識から、科学による探求への道を歩みだしたのであった。

ヘシオドスは「仕事と日々」の中で、一度だけ海を渡り、エウボイア島のカルキスの歌くらべに参加して優勝し、賞品として獲得した三脚釜を村の詩神ムーサに奉納したと書いている。ヘシオドスは吟唱詩人としてあちこち旅をしたに違いないが、旅への言及はこれだけである。これだけではあるが、多分これが生身の人間が自分自身の旅に言及した最初の例であろう。

また、ヘシオドスは船旅のあり方について説明しており、ギリシャという国が海洋国家であり、船による旅の安全性や航海の方法の知識が欠かせないことを書き記していることにも言及しておきたい。

学者たちの旅　ギリシャでは、神話とは世界の起源・生成・構造を語り、自然現象や社会現象を神々の系譜や擬人化によって説明するものであった。ギリシャ人たちは、超自然的な神への想いや呪術的な信仰は薄かったから、神話や伝承による諸現象の理解から離れて

論理的な思考を追求し始めたとき、まず自然界の経験的事象を当時の知識によって可能な限り合理的に説明をしようと試みた。その最初の人がターレスであった。ターレスは前7世紀の後半にエーゲ海のトルコ側ミレトスに生まれた。分別のつく頃になると船に乗り、エジプトや中東への長旅に出かけ、エジプトやカルデアの聖職者から天文学、数学、航海術などについて、当時わかっている最新の知識を学んだという。ターレスは「万物のもとは水である」と言ったと伝えられ、紀元前 585 年の日蝕を予言した話も有名である。水をすべての元としたのは、彼がエジプトやメソポタミヤへの遍歴で、大河の恵みが文明を生んだことを知っていたからであろうといわれる。日蝕については、日蝕の現象を理解はしても、複雑な計算を要する先の予言はまぐれ当たりであろうと言われたりするが、ルチアーノ・デ・クレシェンツォが言っているように、彼が哲学の祖とされるのは、「問題に答えを見出したからではなく、問題そのものを提起したからである。あらゆる神秘の解決をもはや神に帰することを止めて、自分の周囲を観察し、精一杯熟考することこそ宇宙の解釈へ向けての思考が歩み出すスタートであった」(「ソクラテス以前の哲学者たち」)。

ターレス自身は書いた物を何も残していない。したがって、彼の旅の記録もない。しかし、かくして誕生した多くの自然哲学者や彼らに続く哲学の徒は非常に多くの旅をした。ターレスに続くアナクシマンドロス（前 610 年頃～前 546 年頃）は、最初に地図を作成した人として知られることからもわかるとおり、しょっちゅう旅行しており、クセノファネスは 67 年間ずっと世界を遍歴したと吹聴している。また、デモクリトスは当時の誰よりも数多く未踏査の民族や地方を見たと自慢している（「ソクラテス以前の哲学者たち」)。ピタゴラスもエジプトやバビロニアを旅行し、理想国家の建設を夢見て南イタリアのクロトンに移住するなど、その行動半径は広範囲に亘っている。

ギリシャの哲学者アリストテレス（前 384～前 322）は、ヘシオドスや悲劇詩人たちを「神々を語る人々」と呼び、これに対比してターレスたちイオニアの自然学者たちを「自然を語る人々」と呼んだ。そして、ソクラテス以後の哲学者は「人間と社会を語る人々」であるというわけである。ローマ時代の伝記作家ディオゲネス・ラーエルティオスの「ギリシャ哲学者列伝」などによれば、労働は奴隷たちに任せ、自由時間と財産を思うように使ったギリシャの学問好きたちは、ギリシャ国内からエジプト、メソポタミヤ、黒海から地中海西部まで自由に旅をした。探究心の強い人々なら、旅に出るのが当たり前の時代になったのである。しかし、旅はあくまで手段であり、旅自体の具体的な内容を書き残した人はまだいなかった。

そうした中で、旅そのものを目的とし、自分の行った旅先と旅で見たもの、知ったことを詳しく書き残した最初の人がヘロドトス（前 485 頃～425 頃）であった。このことは、言葉を変えれば書物の誕生であり、読者の誕生でもあった。ライオネル・カッソン著（新海邦治訳）「図書館の誕生」によれば、前 5 世紀に入って間もない頃、哲学者であるエペソスのヘラクレイトスや、歴史・地理学者であったミレトスのヘカタイオスのような人々が、自らの著作を朗読するだけでなく書き物にもしたという。つまりこの時期には「読書する

人」も誕生しており、ホメーロスはもちろん、人々に親しまれた詩や散文が読める時代になってきたことを意味している。

ヘロドトスは元祖トラベルライター　観光史に登場してもらう人物としてギリシャ時代を代表するにふさわしい人を１人だけ挙げるとすれば「歴史の父」ヘロドトスである。ヘロドトスは紀元前５世紀の人で、当時一般のギリシャ人には知られていなかった黒海北岸から小アジア（現在のトルコ）一体、メソポタミヤから北アフリカなどを広く旅し、「ヒストリア」（歴史）と題する物語を残した。ヒストリアとはギリシャ語で「探求」を意味するそうだが、物語（ストーリイ）と同義でも使用されるとおり、ヘロドトスの「歴史」は、のちのトゥキディデスの「歴史」が実証を重んじたのとは違い、旅において彼が広く見聞した各地の伝承、風土や習俗の記録など、読者に面白く読んでもらう物語としての要素を多分に持っていた。彼はいわば、史上初の歴史と地誌のルポルタージュ記者でもあり、クリストファー・ハロウェイは彼のことを人類初のトラベルライターと呼んでいる。理由は、ヘロドトスが明確に同時代人や後世の人に伝える目的で旅をし、調査し、それによって得た知識を書き残したからである。藤縄謙三著「歴史の父ヘロドトス」は、ヘロドトスの「歴史」の内容を再整理して項目別に解説した労作であるが、その第１部「総説」の第６章「旅行と地理学」はヘロドトスの旅の目的、旅の仕方から、旅の内容にわたって詳細に分析している。ヘロドトスは後世に古典ギリシャ時代の世界の状況を伝え残してくれた歴史家であると同時に、後世の観光目的の旅行者が必要とする旅行情報を伝えた元祖トラベルライターでもあったのである。

再度強調しておきたいのは、ヘロドトス以前の学者や詩人たちにとって、作品は読み聞かせるのが主であって、朗読のための原稿は書いたとしても、それを読ませるものとして保存することに気を配らなかった。ターレスやソクラテスに書き残したものが伝わっていないのはそのためである。ヘロドトスの「歴史」はその作品の長さからみて、催しなどで一部を朗読することはあったにせよ、聞き手ではなく《読み手》を意識した最初の作品、読み物として書かれた「最初の書物」という記念碑的な作品であった。ヘロドトスが旅を通じて書き残した膨大な記録が、のちの歴史研究に大なる貢献を果たしたことは、いくら高く評価してもし過ぎることはない。

神々の祭典と競技会

個人による旅への最古の言及がヘシオドスによる吟唱競技会への参加の旅であったことはすでに述べた。よく知られているように、前 776 年に運動の競技会としてのオリンピック大会が始まっているが、古代ギリシャでは運動だけでなく，早くから音楽や叙事詩の朗読、詩作などの能力を競い合い、6 世紀末以降は悲劇、喜劇などの演劇も、各ポリスの巨大な劇場で作品を競っていた。これらの競技会には作品を競う参加者はもちろん、数少ない娯楽の機会として観衆が大劇場を埋めたが、中には遠方からの旅人も多かった。これらの競技会の内容は、オリュンピアの運動競技会（各大会の諸競技の勝者の記録がある）のほかあま

り残っていないが、アテナイの春のディオニソス大祭では悲劇詩人たちの競演が何日も続き、無数の悲劇作品が上演された（参加者は１人３作品を提出する義務があった）。無数に演じられた悲劇の中から今日まで残ったのは、アイスキュロス（前 525～456）の７作品、ソフォクレス（前 496～406）の７作品と、ユーリピデス（前 485～406）の 12 作品のみであるが、その質の高さは古典ギリシャ文学の金字塔として輝いている。

村川堅太郎編「ヘロドトス・トゥキュディデス」の解説によれば、ヘロドトスもオリュンピアの祭典で自作を朗読し、聴いていた少年トゥキュディデスが感涙するのを見て、その父親にトゥキュディデスに学問の資質を認めて褒め称えたという古伝が残っている。村川はよくできた作り話であろう（時期的には可能）と言っているが、ギリシャ文化全盛期の前 5 世紀～前 4 世紀、ギリシャの人々にとって運動競技会や、詩の朗読、演劇の競演などを参観することは大きな楽しみであり、これらを鑑賞するための旅を自由に行っていたことが知られるのである。

古代オリンピック大会　ギリシャ時代にあって、観光との関連で特筆すべきことのひとつが BC776 年という早い時期に始まったオリンピック競技大会である。というよりも、この年は特定しうる史上最古の年なのである。オリンピア競技会は正確に４年に１度開催され、その間の期間をオリンピアードと呼ぶが、はっきりした暦がなかった当時のギリシャでは、この年を基点とする年号の数え方があり、第O回オリンピアードの第O年というように数えられていた。前４世紀のエリス人ヒッピアスが作成した競技会の歴代勝利者のリストによれば、前８世紀の勝利者のほとんどがペロポネソス半島西部の出身者であったのに対し、前７世紀には全ギリシャに広がっており、この時期にはすでにオリンピアが全ギリシャ的な神域になっていたことが窺われる。

オリンピアはペロポネソス半島西部の小国エリスにあるが、ここはアルフェイオス川とクラディオス川の合流地点にあって、この地域の交通路の要の場所に位置していた。ゼウスの神域に飾られた奉納品は、この交通路を利用する人々の目を惹き、ステータスを誇示したいという奉献者の願望が充分報われる場所であった。小国エリスがゼウス神域の管理も祭典の主催も任され、大国のエゴに左右されなかったことが長く繁栄が続いた理由であるという。最盛期の前５～４世紀には、ギリシャ全土はもちろん、黒海沿岸から地中海西部に広がっていた植民地からも選手が集まってきていた。

ギリシャは全体を統括する国家を持たず、ポリスという都市国家単位で絶えず戦争を繰り返していた中で、オリンピック開催期間中だけは戦争を中断したばかりか、選手はもとより観戦に出かける旅行者の道中の安全も保証した。今風にいえば、スポーツ・ツーリズムの原点を見ることができるばかりか、後世の「観光は平和へのパスポート」という標語が志向する親善や相互理解の精神をアピールしているようにさえ思われる。人々はオリンピアの祭礼への参加が名目であるにせよ、そこで行われるスポーツ競技を楽しむために遠距離の旅をした。それだけギリシャ時代に旅行が普及していたことを示すものである。さらにいえば、人を集め、人を楽しませるイベント・ツーリズムの発想もギリシャ時代に始

まったといっていいのかもしれない。

オリンピック大会では、陸上競技とレスリングとボクシングが行われたほか、最終日には戦車競争がハイライトして行われた（マラソンは第 1 回近代オリンピック・アテネ大会で、フランスの言語学者ミシェル・ブレアルの提案で行われるようになった）。戦車競争は戦車を所有する金持階級しか参加できなかったから、とくに多くの有名人が競技に参加した。ソクラテスと同時代のアテネのアルキビアデスが優勝し凱旋将軍のように迎えられたという記録が残っているし、ローマ支配の時代に入ってからは、ローマのティベリウス帝がわざわざオリンピアにやってきて戦車競争に参加したという。少なくともキリスト教が国教化する以前のローマでも、オリンピックの人気は高かった。皇帝ネロは、ローマにも肉体訓練の成果を競う催しがあってしかるべきと考え、オリンピアとは別に、５年に一度ローマでも競技会を開催することを決め、実際に紀元６年に大会を開催している。ネロのオリンピックはローマン・オリンピックと呼ばれ、体育だけでなく音楽や美術も競わせ、自らも参加したことはよく知られている。ネロの始めたローマン・オリンピックは 5 年後にもう一度開催されたが、ネロの死によって立ち消えになり、やがてオリンピックの記録から抹消された。

なお、紀元 372 年、テオドシウス帝によってキリスト教がローマ帝国唯一の宗教と定められ、ギリシャ・ローマの神々を異端としたため、オリンポスの神々に捧げるオリンピアの祭典は、紀元 373 年の大会を最後に禁止されて使命を終えた。それに、そもそも全裸で肉体の美しさや能力を競う行為は、キリスト教の教義と相容れないものだったのである。

兵士たちの旅

戦争は最大の非日常である。小国家が成立し、大きな国家に統一される過程で様々な規模やレベルの戦争を繰り返してきた。戦争は社会を変え、人々の暮らしを動揺させる最大の出来事であるから、古来伝承物語は常に戦争と英雄の物語でもあった。ひとたび戦争が始まれば何千人、何万人という大量の人の長距離移動が発生し、多くの人たちが倒れ、勝者は略奪し、敗者は奴隷にされた。幸いに生き残って故郷の土を踏めた人々は、土産品を持ち帰り、未知の国の人々やその暮らしについて語り明かしたことであろう。

しかし、「一将功なって万骨枯る」と言われるように、戦争の物語は王や名のある将たちの英雄物語であって、無名の兵士たちが戦争で何をし、何を思ったかというような記録はほとんど残っていない。交易や公務や学問の旅とはちがい、無名の庶民が生活圏を遠く離れて旅をするとすれば、戦争に駆り出されるか、傭兵になって戦争に行く以外に可能性はなかった。戦争に行けば命の保証はなく、高い確率で死ぬことを覚悟しなければならない。それでも生きて帰ってくれば、名誉や知識や財産を得て帰郷し、英雄扱いされた者も多かったであろう。

アナバシス：敵中横断 6000 里　古代にあって、無名の戦士たちの声をわずかながら歴史に残した例といえば、ギリシャの軍人にして歴史家クセノフォン（前 430 年頃～前 354）が書き残した傭兵たちの帰国物語「アナバシス」であろうか。ペルシャのダレイオス２世（在

位前 424～405）が亡くなり、長子のアルタクセルクセス２世が後を継いだが、次男の小キュロスがクーデタを計画し、1 万人のギリシャ人傭兵を、目的を知らせないままサルデス（小アジア西部のペルシャの拠点都市）に集め、クセノフォンもその 1 人として参加した。前 401 年春キュロスは反乱を決行してサルデスを発進する。長駆小アジア（現トルコ）を横断し、イッソス（地中海の東北端）を経て、ユーフラテス川をバビロン（現イラク中部）まで下る。しかし、キュロスはペルシャ貴族らの支持が得られずクーデタは失敗し、バビロン付近のクナクサの戦いで本人が戦死してしまう。

雇い主を失って目的が無くなったギリシャ人傭兵たちは、やむなく撤収作戦にかかるが、アルタクセルクセス側の謀略にかかって主だった指揮官のほとんどが捉えられ、全滅の危機に陥った。このとき軍を絶望の淵から救ったのが、それまでは一従軍者に過ぎなかったクセノフォンであった。クセノフォンの提案で新たな指揮官と隊長らを選出し、総指揮官になったケイリソポスをクセノフォンが補佐する新体制を作り上げた。そのあとはペロポネソス戦争での従軍経験が豊富だったクセノフォンが腕を振るった。ペルシャの内陸深くにあって食糧にもこと欠き、地理にも不案内で苦しみながらもチグリス川を北上し、アルメニアの山中を抜けて黒海へ辿りつく。黒海から西への旅も苦難続きだったが、クセノフォンの指導で船も利用し、ついにトラキア（ギリシャの北部）までたどり着く。生き残った 5000 人の傭兵は、改めて、ペルシャとの対決に踏み切ったスパルタの傭兵として迎えられて物語は終わる。

この傭兵たちの脱出行を描いたのが「アナバシス」（訳書には『敵中横断 6000 里』の副題がある）である。アナバシスとは「上(のぼ)り」という意味であり、傭兵に応募してバビロン付近まで下(くだ)ってきて、そこで目的を失って再び故郷ギリシャへ向かって上(のぼ)って行く物語というわけである。「アナバシス」は当事者のクセノフォンが書いたものであり、旅の記録という意味では稀有の物語である。英雄の物語でもなく、戦闘が主題の物語でもなく、目的を失った 1 万人もの傭兵たちが《民主的》にリーダーを選び、様々な難関を切り抜けていく話自体が大変面白いし、彼らが通過する各地の風土、様々な民族の習俗などの記述も興味深い。

では、この「アナバシス」に登場する傭兵とはどのような人たちであったのか。当時ギリシャの傭兵は強いことで有名であり、様々な戦闘に参加する人たちが多かった。「アナバシス」（松平千秋訳）第 6 巻第 4 章には次のように書かれている。

> 兵士たちの大部分は、生活に窮したために海を渡ってまで傭兵稼業に乗り出したわけではなく、キュロスの徳望を噂に聞いて、ある者は他の人間を誘って帯同するし、また自腹を切ってまでこの挙に加わったものもいた。その中には父母の許を去ったもの、子を後に残してきたものもいた。キュロスに仕えた者たちがさまざまな厚遇を受けた噂を聞いていたからで、父母や子のために金を稼いで帰るつもりであった。こういう者たちであったから、どうしても無事にギリシャへ帰りたい気持ちが強かったのである。

また、第４巻第７章には、ようやく危地を脱して黒海を見た傭兵たちの様子が次のように描かれる。

> 兵士たちが、「海だ、海だ」と叫びながら、順々にそれを言い送っている声が聞こえてきた。とたんに後衛部隊も全員が駆け出し、荷を負った獣も走り馬も走った。全員が頂上に着くと、兵士たちは泣きながら互いに抱き合い、指揮官にも隊長にも抱きついた。

このようなシーンが描かれたのは、傭兵だけの軍隊という目的のない集団の帰国を扱った物語で、戦争目的の行軍ではなかったからであろう。